

# 現代中国語<sup>1)</sup>の軽動詞について “打”を中心に

王 怡 人

## Abstract

The present thesis aims to investigate the semantic function of the light verb *da* in Modern Mandarin. The recent studies regard *da* as a prefix. But in this paper we will show that the light verb *da* as the first component of compound verb plays a role in a variety of verb derivations. In my discussion, I will make a crucial use of the classification of verbs by Vendler (1967) and the lexical event structure templates by Rappaport Hovav, M. and B. Levin (1995). The conclusion is: to combine with the activity verb which denotes a particular manner of motion, the light verb *da* plays a role in making the manner less specific.

キーワード……軽動詞 語彙概念構造 到達動詞 活動動詞 達成動詞

## 0. はじめに

本稿では、中国語の軽動詞“打”を構成要素とする複合動詞を考察し、軽動詞“打”の複合動詞の構成における意味的な機能を明らかにする。軽動詞とは、〈動詞+動詞〉の構造から成立つ複合動詞において、「構造的意味 (structural aspects of verb meaning)」を有し、「個別的意味 (idiosyncratic facet of verb meaning)<sup>2)</sup>」を持たない第一要素の動詞のことであり、本稿の具体的な研究対象は、〈軽動詞の“打”+動詞〉の形を持つ複合動詞である。次の太字部分はその例である。

(1) a. 他**打量**馬兒。(彼は馬をじろっと見る)

b. 他**打掃**院子。(彼は庭を掃除する)

なお、“打”という動詞は、もともと「打つ、叩く」という本動詞としての意味を持つ。〈“打”+動詞〉を形成する複合動詞の構造には、〈軽動詞の“打”+動詞〉もあれば、〈本動詞の“打”+動詞〉もある。これらは外見が同じであり、形態で区別することはできない。それを見極めるためにも、“打”の意味概念は厳密に検討されなければならない。

本動詞の“打”は、「動作主が一定の速度・衝撃である事物に接触する」というように分析することができ、(2)のような意味構造で表すことができる。

(2) [ x ACT<sub>MANNER</sub> (y) ]

Xが動作主であり、Yが動作(ACT)の影響を与えられる事物である。そして、MANNERは「一定の速度・衝撃で接触する」をさす。

本動詞の“打”は「一定の速度・衝撃で接触する」という具体的に個別的な意味を持つため、「用力地」(力強く)のような副詞によって修飾される((3))。逆に「用力地」に修飾されることができないものは、個別的な意味を持たず、構造的な意味だけをもつため、軽動詞として考えることができる。それゆえ、軽動詞の“打”は(4)のような意味構造に書き換えることができると考えられる。

(3) 他用力地打了我。(彼は私を力強く叩いた)

(4) [x ACT (y)]

以下、どのような副詞が選択されるかによって、<軽動詞の“打”+動詞>と<本動詞の“打”+動詞>の違いを検証していく。まず、軽動詞の例である。

(5) a. 他用力地{打/\*量/\*打量}馬兒。(彼は力強く馬を{叩く/\*量る/\*じろじろ見る})<sup>3)</sup>

b. 他仔細地{\*打/量/打量}馬兒。(彼はしっかりと馬を{\*叩く/量る/じろじろ見る})

(5a)では、「用力地」という副詞は「量」(量る)を修飾することができないが、“打”(叩く)を修飾することができる。にもかかわらず、“打”と「量」を構成素とする複合動詞である「打量」(じろじろ見る)を修飾することができない。また、(5b)では、「仔細地」(しっかりと)という副詞は“打”を修飾することができず、「量」と「打量」を修飾することができる。つまり、「量」は「用力地」によっては修飾されないが、「仔細地」には修飾されるのに対し、“打”は「仔細地」によって修飾されず、「用力地」に修飾されるということになる。そして、「量」の前に“打”がつき、「打量」を合成した後、副詞の使用制限が「量」と同じになる。したがって、修飾されることができる副詞の選択は「量」に支配されるといえよう。このように“打”をつけることによって、もとの動詞(ここでは「量」)を修飾する副詞の選択を変える力のないものが、<軽動詞の“打”+動詞>だと思われる。

同様の原理によって<本動詞の“打”+動詞>を見分けることもできる。

(6) a. 孩子們用力地{打/\*破/打破}了玻璃。

(子どもたちが力強くガラスを{叩いた/\*割った/叩き割った})

b. \*玻璃用力地破了。( \*ガラスが力強く割れた)

(7) a. 老爸用力地{打/\*断/打断}了兒子的腿。

(父さんが息子の足を力強く{叩いた/\*切った/打ち切った})

b. \*兒子的腿用力地断了。( \*息子の足が力強く切れた)

(6)の「破」(割る・割れる)と(7)の「断」(切る・切れる/折る・折れる)は「用力地」に修飾されないにもかかわらず、「打破」、「打断」が「用力地」と共起できる。これは「打」がここで実質的な意味を果たしている、つまり、本動詞として働いているということだと思われる。さらに、(6)(7)のような<本動詞の“打”+動詞>の例では、第二要素の動詞は第一要素の

動詞“打”の「結果補語」となる場合が多い。つまり、このような複合動詞は「動作主が一定の速度・衝撃である事物に接触し、その事物が何らかの結果になる」という意味を持つ。次の例を見てみよう。

(6') 孩子們用力過猛打破了玻璃。

(子どもたちが力を入れすぎてガラスが割れてしまった)

(7') 老爸用力過猛打斷了兒子的腿。

(父さんは力を入れすぎて息子の足を折ってしまった)

「用力過猛」(力を入れすぎて)という副詞句は後ろになんらかの結果を引き出す働きがある。

(6')では、子どもたちが力をいれて、ガラスを叩いた。そして、力を入れすぎた結果、ガラスが割れた。(7')では、お父さんが力をいれて息子の足を打った。そして、その力が強すぎた結果、息子の足が折れた。このような、<本動詞の“打”+結果を表す動詞>は本研究の考察対象からはずしたい。

しかし、次のような用例もよく見られる。

(8) a. 他打破了常規。(彼は慣例を破った)

b. 他打斷了我的話。(彼は私の話を遮った)

(8') a. 他{\*用力/\*用力過猛}打破了常規。

(彼は{\*力強く/\*力を入れすぎで}慣例を破った)

b. 他{\*用力/\*用力過猛}打斷了我的話。

(彼は{\*力強く/\*力を入れすぎで}私の話を遮った)

(8)では、同じ「打破」「打斷」であるが、(8')のように「用力」「用力過猛」で修飾されないのは、後ろの目的語の性質が変わったからといえるかもしれない。つまり、「常規」(慣例)、「我的话」(私の話)のような抽象的なものは、具体的な動作を修飾する副詞「用力」と共起しがたいのである。しかし、次の例を見たい。

(9) 他用力地打開窗戶。(彼は力強く窓をあけた)

(9)の文は成立つが、目的語が具体名詞にもかかわらず「彼は力強く窓を打った、そして窓があいた」という意味にならない。それゆえ、副詞の選択は一見目的語と強く結びつくといえるが、実際に左右するのは動詞の性質である。そうすると、(8)の「打破」「打斷」では「用力」「用力過猛」で修飾できないのは、この場合の“打”に「一定の速度・衝撃で接触する」という意味がないからである。それゆえ、(8)の「打破」「打斷」は<軽動詞の“打”+動詞>とみるべきである。このように、<“打”+動詞>の構造をもち、「一定の速度・衝撃で接触する」という意味を持たない複合動詞は<軽動詞の“打”+動詞>と見なし、「一定の速度・衝撃で接触する」という意味を持つ複合動詞は<本動詞の“打”+動詞>と見なす。また、「打」が二つの用法を持っているため、同じ動詞と複合動詞を生成するとき、二つの用法が生じることも可能になる。

以上「打」を本動詞と軽動詞の用法を見てきた。これを次のように整理する。

(10) a. 打1(本動詞用法): [x ACT MANNER(y)]

b. 打2(軽動詞用法): [x ACT(y)]

(11) 軽動詞: 複合動詞の構成要素に個別意味を持たないもの。

本稿では、以上の定義に基づき、<軽動詞の“打”+動詞>のような複合動詞における第二構成要素の特質を、これらの要素の元の意味と複合動詞の違いなどを明らかにし、軽動詞“打”の意味的な機能を究明していきたい。

## 1. 先行研究と問題点

<“打”+動詞>についての研究には王(1984)、湯(1989)、神谷(1996)、折敷・曹(1997)などがある。このうち、折敷・曹(1997)の<“打”+不及物動詞>を除くと、その他は<“打”+動詞>での“打”は「実質の意味を持たない」という観点で共通する。しかしながら、王(1984)、湯(1989)、神谷(1996)では、“打”を「接辞」<sup>4)</sup>と見なす一方、折敷・曹(1997)では“打”をほかの動詞と組み合わせた物を「並列構造」と「動補構造」<sup>5)</sup>にわけることによって、動詞の前の“打”は動詞として扱っていることがわかる。また、動詞の前に“打”がついた後の意味変化について王(1984)、湯(1989)、神谷(1996)ではあまり述べられていない。以下、折敷・曹(1997)の論説を紹介しつつ、その問題点を検討していきたい。

折敷・曹(1997)では、“打”の語義が不明確になっている<“打”+動詞>を二種類の構造に分ける。すなわち、<“打”+不及物動詞>で構成される「動補構造」と、<“打”+及物動詞>で構成される「並列構造」である。

まず、<“打”+不及物動詞>の場合、“打”は使役の意味を表わすとされ、次のような例が述べられている。

(12) a. 「打破」:「もとからある制限、拘束等を突破する」こと。

例えば「打破纪录」:「記録を更新させる」。

b. 「打断」:「中断させること」。

確かに、(12)を見る限り“打”は本動詞の「打つ、叩く」という意味がなく、「~させる」という意味しか表れない。しかし、この説明はミスリーディングの恐れがある。すでに「はじめに」で論じたが、「打破」「打断」は<本動詞の“打”+結果を表す動詞>と<軽動詞の“打”+動詞>という二つの構造をもっており、これらを一緒に論じることはできず、分けて考えるべきである。折敷・曹(1997)であげられた例は、たまたま<本動詞の“打”+結果を表す動詞>に属さない例のみであり、説明が不十分ではないかと思われる。また、<“打”+不及物動詞>での“打”が本来の「打つ、叩く」という意味ではないといいながらも、構成した複合語が「動補構造」であるとしているのは矛盾である。なお、本動詞の意味を持たない“打”に

おける「～させる」という使役の意味については、次節で詳しく論じたい。

一方、折敷・曹(1997:48-9)では、「並列構造」としての<“打”+及物動詞>について、(13)～(15)の例を挙げ、次のような説明がされている。

中国語では、並列構造にはある働きがある。語義を広くするのである。例えば「打扫」「打量」「打捞」などの“打”には、全て広範にわたる意味が備わっているという特徴がある。これは呂叔湘が 中国文法要略 (呂叔湘文集第一卷、商務印書館、1990)の中で「語義がかなり具体的な語が複合語を構成すると、かなり抽象的な含意が生じる」ことが多々ある」と述べていることに通じるものがある。(下線引用者)

(13) a. 你们赶早**打扫**两间**下房**，让他们去歇歇。

(早く召使の部屋を掃除して、彼らを休ませよう)<sup>6)</sup>

b. 忙了数日，直到廿二日上午，方把诸事**打扫**完毕。

(何日も忙しくて、22日の午前になってやっと物事を全部片付けた)

(14) a. 逐段先**打量**的**实顷畝**。(一くぎりごとにまず正確な土地面積を量る)

b. 那雪雁此时只**打量****黛玉**。(その時、雪雁がただ黛玉をじろっとみた)

(15) a. **捞****饺子**(餃子をお湯の中からすくい上げる)

b. **捞****鱼**(魚をすくう)

c. **打****捞****沉船**(沈没船を引き上げる)

d. **打****捞****鱼蝦**(魚をする)

(13)～(15)を見ると、「語義を広くする」と「全て広範にわたる意味が備わっている」というのは、恐らく目的語の使用範疇が広がるという意味だと考えられる。また、「抽象的な含意が生じる」というのは、(14)の「打量」が「量」の具体的語義から離れていることをさすと思われる<sup>7)</sup>。したがって確かに“打”をつけることにより、本来の動詞の用法が広がったり、意味が抽象になったりするともいえるだろう。

折敷・曹(1997)の分析は、従来の「実質的な意味を持たない接辞」という考え方を一層深めて、“打”をつけることによる意味変化を指摘した。しかし、「語義を広くする」と「抽象的な含意が生じる」という説明は非常に曖昧なものである。まず、(13)から見ると、「打扫」(掃除する)の目的語が「扫」(掃く)でも使える「下房」(召使の部屋)のような具体的なものから、「诸事」(諸事)のような抽象的なものに広がっている。その意味で、目的語が抽象化されているといえる。一方、(14)では、「打量」の目的語は「頃畝」(土地の面積)と「黛玉」(人名)である。「土地の面積」は抽象的であるか具体的であるか判断するのは難しいが、「黛玉」は具体的な人間であり、“打”によって抽象的になったのは恐らく動詞そのものである。果たして“打”をつけることによって、抽象的な含意が生じるというのがどういうことなのかははっ

きりとしない。そして、(15c)の「沈船」(沈没船)は(15a)の「餃子」(ギョウザ)より大きいものであり、(15d)の「魚蝦」(漁)は魚貝類の総称が転じて漁という意味になっているため、(15b)の「魚」(さかな)はその下位分類になり、より具体的になっているといえよう。しかし、辞書によく出てくる例「打撈屍體」(死体を引き上げる)の場合はどうなるのであろうか。「屍體」の体積は「沈船」と「餃子」の中間であり、意味的には死体一般を総称することもでき、「一具屍體」(一体の死体)のように具体的に指すこともできる。それゆえ、「撈」と「打撈」の違いは、恐らく抽象度の問題ではないと思われる。次に、同じ折敷・曹(1997)における例「打聽」(訊ねる)を見てみよう。「打聽」は「聽」(聴く)の前に“打”がつけられて形成された複合語である。「聽」は「聴く」の意味であり、「聽音樂」(音楽を聴く)、「聽電話」(電話に出る)などの用法が見られるが、「打聽」は「打聽消息」(消息・行方を尋ねる)のような用法しかない。「聽」は“打”によって語義が広まったどころか、逆にある特定の用法に狭まってしまっている。以上のように、折敷・曹(1997)で述べられた「語義を広くする」「抽象的な含意が生じる」という分析は、更に検討する余地があると思われる。

本稿では、折敷・曹(1997)における動詞が“打”によって意味変化するという立場にたち、<軽動詞の“打”+動詞>の複合動詞を考察していきたい。まず、主な意味を担う第二構成要素としての動詞特性を考察しながら、軽動詞の“打”と合成する前後の意味変化を考察していきたい。そして、軽動詞の“打”の複合動詞の合成素としての機能を探っていきたい。なお、本研究の対象は現代中国語に限るものであり、(13b)(14a)のような現代中国語には見られない、古典作品による用法を論じない。

## 2. “打”につく動詞

以下の論説は Vendler (1967) の動詞分類を用いるため、ここでは、湯(2002)を参考にして(16)のように簡単に紹介する。そして、それぞれを Rappaport Hovav & Levin (1995) の語彙構造テンプレートに照らし、(17)のように工夫した。

- (16)a. 状態動詞(state verb): 動詞の内部意味において明確な起点と終点が見られず、静的な状態を表すもの。例えば: 知道(知る) 愛(愛する) など。
- b. 到達動詞(achievement verb): 動詞の内部意味において起点が同時に終点であり、状態の変化が瞬時に起きるもの。例えば、倒(倒れる)、垮(潰れる) など。
- c. 活動動詞(activity verb): 動詞の内部意味において明確な起点が見られ、継続することができるもの。例えば、吃(食べる) 跑(走る) など。
- d. 達成動詞(accomplishment verb): 動詞の内部意味において起点と終点が明確なものであり、完成時間を表す時限と共起できるもの。例えば、開(開く) 破(割る)。

(17) a. state : [ z <STATE> ]

b. achievement : [ y BECOME [ z <STATE> ] ]

c. activity : [ x ACT <MANNER> (y) ]

d. accomplishment : [ [ x ACT <MANNER> (y) ] CAUSE [ y BECOME [ z <STATE> ] ] ]

なお、軽動詞の“打”と合成する動詞の種類は、Vendler の4つの分類の到達動詞(achievement verb)と活動動詞(activity verb)しか見られない。説明する前に、ここでもう一回“打”の語彙構造を思い出していただきたい。

(18=10) a. 打1 (本動詞用法): [ x ACT MANNER (y) ]

b. 打2 (軽動詞用法): [ x ACT (y) ]

前述したが、軽動詞の“打”は個別的な意味を持たず構造的な意味を果たす活動動詞である。一方、状態動詞は、時間的制限がない恒常の状態を意味する(影山 1996:42)。つまり、動詞の内部意味において明確な起点と終点が見られない動詞である(例えば「愛」(愛する)「知道」(知る)など)。ある動態的な活動を表す表現と、ある静態的な状態を表す表現との結びつきには、状態変化(BECOME)が常に要求されるため、活動動詞と状態動詞との直接合成が不可能である((19))。それゆえ、軽動詞の“打”を含む複合動詞の構成要素としては、状態動詞は資格はずれだと予想できる((20))。

(19) a. [ activity LS ] CAUSE [ achievement LS ]<sup>8)</sup>

b. \* [ activity LS ] CAUSE [ state LS ]

(20) a. \*打知道

b. \*打愛

以下、到達動詞(achievement verb)と活動動詞(activity verb)が軽動詞の“打”と組み合わせる前後の変化を考察していく。

## 2.1 <軽動詞の“打”+到達動詞>

この種の複合動詞は折敷・曹(1997)でいう「~させる」という使役意味を表す例だと思われる。なぜ使役義が出てくるのであろうか。次の例を見よう。

(21) a. 樹倒了。(木が倒れた)

b. \*樹倒了三分鐘。( \*木が三分間倒れた )

c. 風\*(吹)倒了樹。(風が木を\*(吹き)倒した)

d. 倒 : [ y BECOME TOPPLED ]

「倒」(倒れる、つぶれる)は、物事が横になったり、元の形が崩れたりするような変化が伴う動詞である。(21a)は、(21b)のように継続時間を表す「~了<time>」と共に起する場合、結果状態の持続を表すが、動作の継続時間という意味にならないため、活動動詞ではないことがわ

かる。また、(21c)のように、倒れる原因(風)を表すには、「吹」(吹く)などのような動作を加える必要があるため、「倒」という動詞自体は、活動(activity)をも含む達成動詞ではない。すなわち、「倒」は到達動詞であり、(21d)のような概念構造をもつということになる。このような到達動詞が、軽動詞の“打”と複合動詞を合成すると、(22)のように達成動詞になり、使役義(CAUSE)が自然に生じる。つまり、折敷・曹(1997)でいう「~させる」という意味になるのである。

- (22) a. “打” + 倒 = [x ACT y] + [y BECOME TOPPLED]  
b. 打倒: [x ACT y] **CAUSE** [y BECOME TOPPLED] = accomplishment

- (23) a. 他**打倒**了内閣。(彼は内閣を倒した)  
b. 他在一年內**打倒**了内閣。(彼は一年で内閣を倒した)

「打倒」においては“打”という activity が「倒」という achievement により終点がつけられるため、(23a)は(23b)のように完成時限を表す「在<time>内~」と共起することができる。次の「垮」(潰れる)・「打垮」(潰す)も同じように解釈できる。

- (24) a. 牆**垮**了。(壁が潰れた)  
b. \*牆**垮**了三分鐘。(壁が三分間潰れた)  
c. 觀眾\*(壓)**垮**了圍牆。(観客が壁を\*(押し)潰した)  
d. 垮: [y BECOME COLLAPSED]

- (25) a. “打” + 垮 = [x ACT y] + [y BECOME COLLAPSED]  
b. 打垮: [x ACT y] **CAUSE** [y BECOME COLLAPSED] = accomplishment

- (26) a. 美國布希政權**打垮**伊拉克海珊政權。  
(アメリカのブッシュ政權はイラクのフセイン政權を潰した)  
b. 美國布希政權在一年內**打垮**伊拉克海珊政權。  
(アメリカのブッシュ政權は一年でイラクのフセイン政權を潰した)

(24)の到達動詞「垮」は、軽動詞の“打”と組み合わせたり((25))、(26)のように完成時限(下線部)と共起できる達成動詞になる。

なお、このように<軽動詞の“打” + 到達動詞>を構造とする複合動詞は、外見が<本動詞の“打” + 結果を表す動詞>とまったく同じなので、後ろの目的語の選択は“打”が使役という意味しかなくても、本動詞と混同されるため、制限される。

- (27) a. \*風**打倒**了樹。(??風が木を倒した)  
b. \*觀眾**打垮**了圍牆。(??観客が壁を潰した)

次に、「破」(割れる、破れる)・「打破」(割る、破る)をもう一度見てみよう。

- (28) a. 玻璃**破**了。(ガラスが割れた)  
b. \*玻璃**破**了三分鐘。( \*ガラスが三分間割れた)  
c. 他\*(撞)**破**了玻璃。(彼はガラスを\*(ぶつかって)割った)



d. 破 1 : [ y BECOME BROKEN ]

(29) a. 他**破**了紀錄。(彼は記録を破った)

b. 他在一分鐘內**破**了紀錄。(彼は一分間で記録を破った)

c. 破 2 : [x ACT ]CAUSE [BECOME BROKEN ]

(30) a. “打” + 破 = [x ACT y ]+[y BECOME BROKEN ]

b. 打破 : [x ACT y ] **CAUSE** [y BECOME BROKEN ] = accomplishment

(31) a. 他**打破**了紀錄。(彼は記録を破った)

b. 他在一分鐘內**打破**了紀錄。(彼は一分間で記録を破った)

「破」は(28)のような到達用法もあれば、(29)のような達成用法もある。軽動詞の“打”と複合動詞を合成するのは、どちらなのであろうか。到達用法の場合は、前述の「倒」、「垮」と同じステップであり((30))、(31)のような軽動詞の“打”が含まれる達成用法が得られる。(31)の軽動詞の“打”が含まれる達成用法の文は、(29)の動詞本来の達成用法からなる文と完全に同じ意味を示す。果たしてすでに達成用法をもつ動詞が、軽動詞の“打”によって更に達成用法をつくるのはなぜであろうか。そして、もし、「打破」の構成が(30)のように<軽動詞の“打”+到達動詞>ではないならば、なぜ本来 activity が含まれる達成動詞に、さらに使役が生じる軽動詞の“打”をつける必要があるのか。これらの問題を解決するため、「破」についてさらなる探っていく必要がある。「破」の達成用法の例には(32)が見られる。

(32) a. 他情急之下**破**門而入。(彼は切羽詰って、ドアを壊して入った)

b. **破**釜沉舟的決心。(なべを壊し、船を沈める決心)

c. 她**破**例穿裙子上學。(彼女は慣例を破って、スカートで学校に行く)

実は、「破」の達成用法は、(32)のように熟語や慣用句がほとんどであり、達成の「破」における用法はかなり限られている。熟語や慣用句でなく、達成用法で表れる場合、(28c)のように具体的な動作(ここでは「撞」(ぶつかる))が必要になる。つまり、大多数の「破」を使う文では、[BECOME BROKEN]という変化の原因(CAUSE)を明確するために、[x ACT y]を表す別の動詞が要求されるのである。また、(32)の用法はすでに定着しているので、同じ意味を持つ達成の「打破」に変えた場合は不自然な文になるが、(32c)を(33a)に工夫することで同じ意味を表すことができる。そして、(33b) (33c)のような交差使用は認められない。つまり、達成の「破」イコール「打破」、ここでの「例」イコール「慣例」にもかかわらず、「破例」と「打破慣例」の組み合わせしかできない。その理由としては、軽動詞の“打”とほかの動詞の組み合わせとの音韻的な条件も考えられるが、ここでは、「打破」の構成について(30)のように<軽動詞の“打”+到達動詞>によるものだと考えたい。これは<打+到達動詞>が他の例で認められるので、これを利用して新たな形を加えたくないと考えるためである。なお、軽動詞の“打”を含む複合動詞の音韻条件について稿を改めて論じたい。

(33) a. 他**打破慣例**穿裙子上學。(彼は慣例を破って、スカートで学校に行く)

- b. \*他**打破**例穿裙子上學。
- c. ??他**破慣例**穿裙子上學。

達成用法があるかどうかにかかわらず、到達用法をもち、軽動詞の“打”と合成できる動詞は、ほかに「斷」、「消」、「亂」、「通」、「岔」、「住」、「開」など数多く存在する。これから見ると、本来の到達用法が軽動詞の“打”により使役義をもつ達成用法に拡張するということになる。

## 2.2 “軽動詞の打 + 活動動詞”

### 2.2.1 マナーがゆるくなることによる意味変化

まずは次の例を見よう。

- (34) a. 他**掃**院子。(彼は部屋を掃く)
- b. 他**掃**院子**掃**了三個小時。(彼は部屋を3時間掃いた)
- c. \*他在三分鐘內**掃**院子。
- d. 他在三分鐘內**掃好**院子。(彼は部屋を3分で掃き終わった)
- e. 掃: [x ACT<sub>MANNER</sub> y]

「掃」(掃く)は、継続時間を表す「~了<time>」と共起でき((34b))、完成時限を表す「在<time>内~」と共起するには結果補語の「好」が必要な((34d))活動動詞である。「掃」(掃く)は、箒のあるものの平面に接触して動かすことであるので、(34e)のような概念構造で表すとき、「箒と物体の接触」のようなマナーが必要とされる。一方、軽動詞の“打”がつき、「打掃」(掃除する)になった場合はどうなるであろうか。

- (35) a. 他**打掃**院子(彼は部屋を掃除する)
- b. 他**打掃**院子**打掃**了三個小時。(彼は部屋を3時間掃除した)
- c. \*他在三分鐘內**打掃**院子。
- d. 他在三分鐘內**打掃好**院子。
- e. 打掃: [x ACT y]

(35)の例は、(34)の文に、そのまま軽動詞の“打”をつけたものである。文の使用と意味は、両者ともあまり変わりがない。つまり、「打掃」は「掃」の意味を受け継ぎ、新たな意味を生じていない。ただし、軽動詞の“打”がついたことにより、「掃」で見られるマナーが「打掃」では見られなくなっている。ここでの「打掃」と「掃」との違いは、掃除する道具にある。すなわち、後者は箒に限られるのに対し、前者は雑巾など掃除全般にわたる。それゆえ、「掃」は床、部屋、庭などの場所を掃くという意味に限定される一方、「打掃」は机を拭いたり、窓を磨いたり、物品を洗ったりすることも含まれる。

次に、「攪」・「打攪」を見よう。

- (36) a. 拿筷子在湯裡攪。(箸をスープに入れてかき混ぜる)  
 b. 拿筷子在湯裡攪了三個小時。(箸をスープに入れて三時間かき混ぜる)  
 c. \*三秒內拿筷子在湯裡攪。  
 d. 攪: [x ACT MANNER y]

「攪」(かき混ぜる)は、手や道具を使って、それをある物質に入れたまま動かし混ぜ合わせることである。例えば(36)のように箸をスープの中に入れ、何かをまぜあわせるようにすることに「攪」を使う。この動作を成立させるには、入れるもの、されるもの、そして互いの接触、さらに動かなければならないというマナーが要求される。そして、(36)でわかるように、「攪」は、継続時間を表す「~了<time>」と共起でき((36b))、完成時限を表す「在<time>内~」と共起できない((36c))活動動詞である。それゆえ、「攪」は(36d)のような意味構造であると仮定することができる。一方、「攪」に“打”をつけると、マナーの変更が見られる。

- (37) a. 我打攪了老師。(先生のところにお邪魔した)  
 b. 我打攪了老師三個小時。(先生のところに三時間お邪魔した)  
 c. \*我在三分鐘內打攪老師。  
 d. 打攪: [x ACT y]

(37)では、「打攪」は「攪」の意味(かき混ぜる)を受けつつ、目的語は「老師」(先生)をとる。しかし、人間をかき混ぜるとことはまずありえないため、動詞自体が何かの変化が起きたと考えられる。これは、「攪」が、軽動詞の“打”によりマナーがゆるくなったということだといえよう。つまり、「攪」は、本来具体的な物質とそれとあるものの物理的な接触を要求するが、「打攪」になると、物理的な接触というマナーが消えたということである。簡単にいえば、人の邪魔になる、人のところにお邪魔する(人を訪問する)という意味になる。

このような軽動詞の“打”をつけることでマナーがゆるくなり、合成した複合動詞の意味が本来の動詞の意味を受けながら、新たに展開する動詞はいくつかある。「打包」はそのうちの一つである。

- (38) a. 他用報紙包便當。(彼は新聞紙で弁当を包む)  
 b. 他用報紙包便當包了三分鐘。(彼は三分間新聞紙で弁当を包む)  
 c. \*他在三分鐘內用報紙包便當。  
 d. 他在三分鐘內用報紙包好便當。(彼は三分で新聞紙で弁当を包んだ)  
 e. 包: [x ACT MANNER y]

(38)でわかるように「包」は「量」と同様、継続時間を表す「~了<time>」と共起でき((38b))、完成時限を表す「在<time>内~」と共起するには、結果補語の「好」が必要な((38d))活動動詞である。また、「包」とは物全体を被せるように紙や布の中に入れることであり、この動作を成立するには、紙や布などのような平面でやわらかい物が必要される。

一方、「打包」は「梱包する」であり、梱包するには布・紙の代わりに紐、箱などを使ってもいい。物全体を被せるように中に入れるという意味は変わらないが、使用する道具が変わる。それゆえ、「打包」は「包」の意味を受け取りつつマナーがゆるくなるといえる((39))。しかし、マナーがゆるくなるにもかかわらず、「打包」の目的語は常に「行李」(荷物)となる。「打包」の意味は、単純な「包む」から、「整理する」に拡張し、特に「荷物を梱包する、整理する」という表現が定着したと考えられる。さらに(41)のように、荷物が常に「運ばれてどこかに移動する」という意味から、「持ち帰り」の意味に拡張したのではないと思われる。

(39) 打包: [x ACT y]

(40) a. 明天要出國，行李都還沒**打包**。(明日出国だが、荷物をまだまとめていない)

b. **打包**行李**打包**了三個小時。(荷物を三時間まとめた)

c. \*在三分鐘內**打包**行李。

(41) 這些菜請幫我**打包**起來。(この料理を(持ち帰れる様に)パックにつめてください)

次に、折敷・曹(1997)で論じられた「打量」をもう一度検討してみよう。上述したように、「打量」は、軽動詞「打」と動詞「量」を組み合わせた複合動詞である。「量」は「はかる」という意味であり、(42a)の文が(42b)のように、継続時間を表す「~了<time>」とは共起でき、(42c)のように完成時限を表す「在<time>内~」とは共起できない<sup>9)</sup>。そして、「完了」を表すには、(42d)のように「好、完」などの「結果補語」が必要される。それゆえ、「量」は動作を表す活動動詞だと考えることができ、(42e)のような意味構造をもうけることができる。(42e)で示したマナーは、「量」とほかの活動動詞の区別をする個別的な意味をもつ。つまり、量るというのは物事の数量・程度・長さ・重さなどを調べて知ることなので、「量」という動作が成立するには、動作する人は勿論、調べられるものも必要である。そして、調べることに使われる尺度も必要である。一般的に尺度と物は何らかの接触が必要である。このような個別意味を(42e)でマナーとして示す。

(42) a. 用尺**量**布。(物差しで布を量る)

b. 用尺**量**布**量**了三分鐘。(三分間物差しで布を量る)

c. \*在三分鐘內用尺**量**布。(三分で量り始める)

d. 在三分鐘內用尺**量**{好、完}布。(三分で量り終わる)

e. 量: [x ACT MANNER y]

一方、「打量」は、心の中で何かを思案しているように物事を見つめることである。(43)でわかるように、「打量」は継続を表すことができるが(43b)、完了を表すことができない((43c))ため、活動動詞になる。また、「打量」の構成要素としての“打”は軽動詞であり、実質的な意味を持たない。そのため「打量」の意味を果たす役割を担うのは、第二要素の「量」になる。しかし、以下の論述でわかるように、「打量」の使い方は「量」のをそのまま用いられるのではなく、両者が表す意味にも違いが見られる。これは(42')と(43')で説明できる。

- (43) a. 警衛打量陌生男子。(警備員は見知らぬ男の人をじろじろ見る)  
 b. 警衛打量了陌生男子一分鐘。  
 (警備員は見知らぬ男の人を一分間じろじろ見た)  
 c. \*警衛在一分鐘內打量陌生男子。  
 (\*警備員は見知らぬ男の人を一分間でじろじろ見た)
- (42') \*用尺打量布。  
 (43') \*警衛量了陌生男子。

もともと「量」が使える文((42))は“打”がつくと非文になり((42'))、「打量」が使える用法((43))を「量」で表すと使えなくなる((43'))。これから、“打”の有無においてことばの変化が見られるとわかる。具体的に探っていくと、「打量」は心の中で何かを思索しているように物事を見つめることである。言い換えれば、視線で物事について何かを調べようとしていることだといえよう。この点では、「量」の「何かを調べて知ること」と一致しているので、「量」の意味をそのまま用いているといえよう。しかしながら、「量」は「尺度が必要であり、尺度と物の接触が必要」というマナーに制限される一方、「打量」はこのようなマナーが見られない。つまり、(42')が非文になるのは、「打量」には「尺」(物差し)が必要とされないからである。「用尺」(物差しで)を取れば正しい文になる。そして、(43')が非文になるのは、調べられるものがはっきりしないためである。見知らぬ男の人について、身長、体重など量ることのできる要素は多々あるので明示しないと不完全な文になる。(43')を正しい文にするためには、身長、体重など調べられることを明示したり、もしくは物差しを示したりする必要がある。これといえるのは、「量」が第二要素として意味的主要部を果たす複合動詞「打量」においては「量」の意味が受け継がれるが、軽動詞の“打”が存在するため、「量」のマナーはゆるくなるということである。それゆえ、「量」の意味概念の(42e)に対し、「打量」は(44)で表現することができるのである。

(44) 打量: [x ACT y]

動詞の意味構造がマナーの変化によって変わるために、その動詞と共起できる目的語も当然変わる。さらに厳密に言えば、動詞の意味も変わってくる。(42')は「用尺」をとると正しい文になるが、「布を量る」という解釈ができず、「布をじろじろ見る」という意味になる。(43')は物差しや目的語を補強しても「見知らぬ男の人をじろじろ見る」という意味にはならず、「見知らぬ男の人を量る」という意味になる。つまり、「量」は軽動詞の“打”がつくことによって、マナーがゆるくなり、意味が「量る」から「じろじろ見る」に変化するということになる。

もっとわかりやすい例がある。

- (45) a. 他聽音樂聽了三個小時。(彼は三時間音楽を聞いた)  
 b. \*他在三分鐘內聽音樂。  
 c. 他在三分鐘內聽完音樂。(彼は音楽を三分間で聞き終わった)

d. 聽: [x ACT<sub>MANNER</sub> y]

(46) a 我寫信向他打聽花子的消息。(私は彼に手紙を書き、花子の消息を尋ねる)

b. 我打聽花子的消息打聽了三天。(私は三日間花子の消息を尋ねていた)

c. \*我在三分鐘內打聽花子的消息。

d. 我在三分鐘內打聽出花子的消息。(私は三分で花子の消息を得た)

e. 打聽: [x ACT y]

簡単にいうと、活動動詞の「聽」(聴く)は、情報や音が耳から入ることであるが、軽動詞の“打”をつけるによってマナーがゆるくなる。つまり、もともと耳で情報を得るというマナーが(46)のように手紙で情報を収集することができるようになる。したがって、「打聽」は「聽」の聴くという意味から訊ねるとい意味に拡張することが可能になる。

以上、軽動詞の“打”と活動動詞を組み合わせた複合動詞を見てきた。軽動詞の“打”が活動動詞につくことによって、活動動詞本来のマナーがゆるくなることがわかる。そして、合成した複合動詞の意味が本来の活動動詞から拡張し、さらに新たな特定な使い方が定着することもあるといえる。

## 2.2.2 軽動詞の“打”による第二構成要素である動詞の本来の意味の傾き

ここで見る例は、2.2.1 で論じたような意味変化は見られないが、軽動詞の“打”がつくことによって本来の動詞の用法がある方向に傾くものである。まず、「滾」・「打滾」をみよう。

(47) a. 他滾球滾了三分鐘。(彼はボールを三分間転ばした)

b. \*他在三秒內滾球。

c. 他三秒內滾球百米。(彼は三秒でボールを百メートル転ばした)

d. 滾 1: [x ACT y]

(48) a. 小孩在地上滾了三分鐘。(子どもが床で三分間転がる)

b. \*小孩三秒內在地上滾。

c. 小孩三秒內從這兒滾到那兒。

(子どもが三秒でここから向こうまで転がっていった)

d. 滾 2: [x ACT ]

(49) a. \*他打滾球打滾了三分鐘。

b. 小孩在地上打滾了三分鐘。(子どもが床で三分間転がる)

c. 打滾: [x ACT]

ごらんのように、「滾」は継続時間と共に起せる活動動詞である。そして、(47)のような他動用法もあれば、(48)のような自動用法もある。「滾」に軽動詞の“打”がつくことによる意味変化が見られないほか、他動用法がなくなり、自動用法が残される。そして、この軽動詞の“打”

をつけた複合動詞の自動用法は、もとの動詞の自動用法とまったく同じような表現ができる((49))。軽動詞の“打”は「滾」を自動用法に偏る作用をするといえよう。同じ現象は次の「轉」も見られる。

- (50) a. 他**轉筆轉**了三分鐘。(彼はペンを三分間回した)  
 b. \*他在一分鐘內**轉筆**。  
 c. 他在一分鐘內**轉筆**五百圈。(彼は一分でペンを五百回、回した)  
 d. 轉 1: [x ACT y]
- (51) a. 他**轉**了三分鐘。(彼は三分間回した)  
 b. \*他一分鐘內**轉**。  
 c. 他一分鐘內**轉**了百圈。(彼は一分で百回、回した)  
 d. 轉 2: [x ACT]
- (52) a. \*他**打轉筆打轉**了三分鐘。  
 b. 他**打轉**了三分鐘。(彼は三分間回した)  
 c. 打轉: [x ACT]

「轉」には、(50)の他動用法と(51)の自動用法があるが、“打”がつくと、(52)が示すように本来の動詞と同様な自動用法しか残らない。

また、(53)は目的語の使用におきる変化である。

- (53) a. 笨賊**劫財劫**了三小時。(まぬけな泥棒がお金を三時間略奪した)  
 b. 笨賊\*三分鐘內**劫財**。  
 c. 笨賊三分鐘內**劫財**百萬。(まぬけな泥棒が百万を三分で略奪した)  
 d. 劫: [x ACT y]
- (54) a. 小偷**打劫**店家。(こそ泥が店に強盗に入る)  
 b. **打劫**店家**打劫**了三小時。  
 c. \*在三分鐘內**打劫**店家。  
 d. 在三分鐘內**打劫**店家百萬。  
 e. 打劫: [x ACT y]

「劫」は(53)のように動作を表す活動動詞であり、軽動詞の“打”がついた「打劫」も「劫」とまったく同じような文ができる活動動詞である((54))。しかし(55)でわかるように、「劫」と「打劫」の目的語に違いが現れる。

- (55) a **劫**{財/囚/機/獄/店家}。(Th/Th/Th/Pa/Pa)  
 b **打劫**{財物/囚犯/飛機/監獄/店家}。(Th/Pa/??Pa/??Pa/Pa)

「劫」と「打劫」の目的語を比較するため、(55b)では、「打劫」の目的語を(55a)の「劫」に照らしながら、意味を変えないまま、なるべく自然に近い響きを表現できるように工夫した<sup>10)</sup>。このように、「劫」の目的語において、「財物」を除き、「打劫」になると目的語が取られるもの

(Th; Theme) から損を受ける被影響者 (Pa; Patient) になる。興味深いのは「囚」・「囚犯」(犯人) という目的語である。「劫囚」は犯人そのものを奪う意味をする一方、「打劫囚犯」は犯人から何かを奪うという意味になる。つまり、同じ犯人を表す「囚」と「囚犯」はそれぞれ同じ強盗を表す「劫」と「打劫」の目的語になると、前者は奪われる対象 (Th) になるが、後者は被害を受けるほう (Pa) になる。(55b) で「飛機」(飛行機) と「監獄」(監獄) にダブルクエスチョンマークがついたのは、聴きなれないという意味だが、いうならば、「劫機」が飛行機そのものを奪うというような意味になるのと異なり、「打劫飛機」は飛行機に所属するものを奪っていくというような意味になる。これからすると、軽動詞の“打”による本来の動詞の目的語が制限されるといえよう。このような現象が、軽動詞の“打”によってどのように解釈できるかは今後の課題になる。

### 3. おわりに

本稿では、軽動詞の“打”の役割を考察した。(56)のようにまとめることができる。

(56) a. <軽動詞の“打”+到達動詞> 達成動詞

b. <軽動詞の“打”+活動動詞>

マナーのゆれによる意味変化

本来の活動動詞のいくつかの意味が特定の一方の方に傾く

軽動詞の“打”は、実質的な意味を持たないにもかかわらず、その構造的な意味が立派な役割を果たしている。ある動詞が軽動詞の“打”と組み合わせることによって、意味的・用法的に規則正しい変化が見られる。その変化は、もとの動詞の意味を新しく拡張しつつある特定の用法に定着させたり、もとの動詞の意味を偏らせるものである。なお、本稿では主に“打”がつくことによる意味変化を考察したが、意味的に大きな変化や本来の動詞意味の偏りが見られないもの(例えば「打擾」(邪魔する)、「打理」(管理する、整理する)など)もある。それゆえ、軽動詞の“打”についての研究は、さらに統語的や音韻的な視点から考察する余地がある。それに、もとの動詞の用法のあるものに偏る例も、統語的や音韻的なアプローチから原因を探る必要がある。これらは今後の課題である。

ここで補足しておきたいのは、折敷・曹(1997)で問題になっている「打撈」の用法である。今まで論じてきたように、“打”には本動詞と軽動詞の用法がある。ここで述べた本動詞は「打つ、叩く」という意味であるが、周知のように“打”は目的語により意味がかわる特殊な動詞でもある。例えば「打つ、叩く」のほかに(57)のような用例がある。

(57) a. 打毛衣：セーターを編む

b. 打傘：傘をさす

c. 打水：水を汲む



d. 打棒球：野球をする

e. 打魚：魚をとる

この場合の“打”は、後ろの目的語によって意味がはっきりしたものになり、そして目的語との組み合わせによって意味がかわっていく。この点で“打”自体の意味が不明確な面もありながら本動詞としての個別意味をもたないとも言い切れない。このボーダーラインがあるため、「打撈」のようなことばを分析するには困難にぶつかるのである。

「打撈」には“打”に「打つ、叩く」という意味がないため、<打つを表す本動詞の“打”+動詞>ではないとわかる。一方、“打”には、「打魚」(魚をとる)、「打鳥」(鳥をとる)などのような「捕る、狩をする」(57e)という意味がある。「打撈魚蝦」での「打撈」は、(57e)の「打魚」と(15b)の「撈魚」から、意味の近い二つの動詞から合成した複合動詞だということが可能である。つまり、「打撈」の構造は<捕るを表す本動詞“打”+動詞>になる。このように二つの類義語からなる<本動詞の“打”+動詞>を形する複合動詞には、他に「打造」「打發」「打算」などが考えられる((58))。

(58) 打首飾(アクセサリーをつくる):「打造家具」(家具をつくる)

打電報(電報を出す):「打發記者」(記者を追い払う)

打主意(思案を決める):「打算出國」(出国するのを考える)

さらに、「打つ、叩く」を表す本動詞とその類義語との組み合わせも見られる。「打撃」(うちたたく)、「打鬧」(ふざけ騒ぐ)、「打罵」(叩いたり叱ったりする)、「打殺」(たいたたり殺したりする)などが考えられる。また、折敷・曹(1997)では、「打敗」(負ける)を<語義が不明確な“打”+結果を表す動詞>をみなすが、筆者はそれを<本動詞の“打”+動詞>という構造であることの可能性を保留したい。というのは、「打敗」、「打輸」(負ける)、「打勝」(勝つ)、「打贏」(勝つ)などは常に球技運動の試合の勝負を表すため、この“打”は(57d)のように本動詞とみなすことも十分あると思われるからである。つまり、<運動・遊戯を表す本動詞の“打”+結果を表す動詞>ということである。

なお、本動詞の“打”とほかの動詞を構成要素とする複合動詞については、さらなる厳密な考察が必要であると思われる、今後の研究課題としたい。

<注>

- 1) 中国で使われている「普通話」と、台湾における公用語「國語」は基本的には同じようなものであるが、細かいところに微妙な違いがある。本稿では母語チェックは台湾の用法をメインにするが、中国の用法と大きな違いがあるところは、それを補充する形で考察を進めていきたい。また、一貫性を求めるため、中国語の表記も繁体字にこだわりたいが、引用の例文は簡体字の場合は、そのまま使うことにする。
- 2) 用語は Rappaport Hovav, M. and B. Levin (1996)のものである。
- 3) 例文の日本語訳における適切さを判定するしるし(「\*」「??」など)は原文の中国語に対するものである。

現代中国語の軽動詞について(王)

- 4) 王(1984)では「动词の前符号」、湯(1989)では「動詞前綴」、神谷(1996)では「动词前綴」という。
- 5) 「動補構造」とは<動詞+結果補語>という形をしているものを指す。
- 6) (13)~(15)の例文は折敷・曹(1997)のものであるが、太字と下線は引用者によるものである。また、この太字は問題とされる動詞であり、下線は目的語を表す。さらに、例文後の日本語訳は引用者が折敷・曹(1997)の解釈に沿って加えたものである。
- 7) 折敷・曹(1997)では、「“打量”は、心の中で見当をつけること、考慮することを指しており、“量”の具体的語義から相当離れている」と述べられているが、「具体的語義」とは何かを説明していない。これについて、次節で述べる。
- 8) Rappaport Hovav, M. and B. Levin (1995:72)を参照。
- 9) (16c)は「三分間で布を量り終わる」という意味にならない。しいていえば、「三分間以内布を量り始める」という意味にしかならない。
- 10) これはまた軽動詞の“打”が音韻的に何らかの役割を果たしている手がかりの一つだと思われる。

<参考文献>

- 影山太郎 1996 『動詞意味論 言語と認知の接点』くろしお
- 神谷 修 1996 「试论“打”从动词到动词前缀的发展」『言語文化論集』第17巻 第2号  
名古屋大学言語文化部
- 折敷瀬興、曹 先擢 1997 「“打”の語義について」『言語文化』34 一橋大学語学研究室
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, Linguistic Inquiry Monograph 26, MIT Press.
- (1996) “Two Types of Derived Accomplishments”, in M. Butt and T.H. King, eds., *Proceedings of the First LFG Conference*, 375-388. (14 pages, postscript) (菅山謙正 編注 2002 『ことばの意味から文の姿を探る 英語語彙意味論の演習』英宝社.所収)
- 湯 廷池 1989 『漢語詞法句法讀集』台湾：學生書局  
1989 『漢語詞法句法續集』台湾：學生書局  
2002 「言語分析與英語教學：英語動詞的分類與功能」(授業資料)
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press
- 王 力 1984 『王力文集』濟南：山东教育出版社
- 主指導教員(大石 強教授) 副指導教員(船城俊太郎教授・佐藤徹郎教授)